

全国盲ろう教育研究会 会報 第15号

2017. 3月発行

全国盲ろう教育研究会事務局

桜の便りが各地から届く季節となりました。もうすぐ新年度を迎えますが、皆様にとりまして、実り多い日々となりますように、研究会としても情報発信に努めていきたいと思っております。

●全国盲ろう教育研究会第14回研究協議会・定期総会報告

2016年8月6日（土）・7日（日）、全国盲ろう教育研究会第14回研究協議会を国立特別支援教育総合研究所にて開催しました。久しぶりの久里浜の海を眺めながらの研究協議会に全国から70名ほどの方が参加くださいました。盲ろうの子どもたち、ボランティアさんを含めると約100名という方々にお集まりいただきました。



国立特別支援教育総合研究所理事長よりご挨拶

今回の研究協議会実施にあたりましては、国立特別支援教育総合研究所と筑波大学附属久里浜特別支援学校のご支援、ご協力をいただき、快適な環境の中で研究協議会が実施でき、盲ろう児者のプログラムも進められましたことに感謝いたします。また、盲ろう児者の活動プログラムの実施にあたりましては、多くのボランティアの方々にご協力いただきましたこと、心よりお礼申し上げます。

以下のようなプログラムで実施しました。

【1日目 8月6日（土）】

○開会式

○実践報告

「卒業後の生活、今とこれから」

盲ろう児とその家族の会 ふうわ 広重 真佐子 氏

盲ろう児とその家族の会 ふうわ 貝嶋 敦子 氏

- ワークショップ・分科会（以下の4グループに分かれ、実施）
 - ①盲ろう幼児児童生徒を初めて担当したあなたへ
 - ②盲ろう擬似体験 * 諸般の事情により途中から③に合流
 - ③国立特別支援教育総合研究所生活支援棟・スノーズレン見学
 - ④サポートブックをつくってみよう

【2日目 8月7日（日）】

○全国盲ろう教育研究会第14回定期総会

○講演

「盲ろう者」取材体験記

～盲ろう者の取材から見た盲ろう教育の現状と課題～

TBSテレビ報道局 報道特集ディレクター 河北 敏之 氏

○ポスターセッション

○ワークショップ・分科会報告

- ・1日目の各ワークショップ・分科会の報告
- ・盲ろう児者の活動の様子について報告

○閉会式

2日間の様子を紙面にて報告いたします。

* なお、事務局の責任において概要をまとめさせていただきましたことについて、ご了承下さい。



●第14回定期総会報告 【8月7日 9:00~9:30】

会長挨拶後、出席者数・委任状数を報告・確認し、議事案件の審議に入りました。

・議案1 2015年度事業報告

以下の通り、提案がなされました。

1. 運営委員会を随時開催し、運営基盤の整備を図った。
2. 全国盲ろう教育研究会会報に総会および研究協議会の報告を掲載・配布し、啓発活動をすすめると共に、会員の獲得に努めた。
3. 全国盲ろう教育研究会会報を発行し、教育研究の向上に寄与すると共に会員相互の情報交換に役立てた。
4. 全国盲ろう教育研究会第13回研究協議会を開催し、盲ろう児・者に関わる教育研究の向上を図るとともに、第14回研究協議会の準備を進めた。
5. 「盲ろう教育研究紀要第12号」の発行に向けて編集作業を行ったが、発行には至らなかった。
6. Webサイトの内容の充実を図ったが、十分な情報提供には至らなかった。
7. 東京都盲ろう者支援センターと共催で、盲ろう教育に携わる教員等を対象とした研修会を開催し、教育の充実を図った。

○原案通り、了承されました。

・議案2 2015年度会計報告

以下の通り、提案がなされました。

【2015年度全国盲ろう教育研究会会計報告】

【収入の部】

* 単位は円

項目	2015年度予算	2015年度決算	備考
前年度繰越	214116	214116	
年会費	260000	232000	2016年3月31日現在、会員数126名。納入者88名（複数年度分の納入を含む）、未納者38名。
ご寄付	—	28080	
利息	—	96	
合計	471416	474292	

【支出の部】

* 単位は円

項目	2015年度予算	2015年度決算	備考
定期総会報告書発送費	30000	16016	会報第14号に定期総会報
会報発送費	30000		
第13回研究協議会案内発送費	30000	27440	
研究紀要発行費	200000	未執行	
研究紀要発送費	50000	1144	研究紀要11号の追加発送
Webサイト維持費	35000	22248	
事務費	45000	32355	
会議費	50000	34880	第92回～第95回運営委員会開催の交通費実費
予備費	4116	3002	弔電
合計	474116	137085	

残金337207円【収入 4742922円－支出 137085円】は次年度に繰り越します。

【第13回全国盲ろう教育研究会研究協議会会計報告】

【収入の部】

* 単位は円

項目	金額	備考
参加費	140000	会員×20、非会員×20=60000+80000=140000
夕食交流会費	68040	3240円×21名
ご寄付	5460	夕食交流会費一人3500円徴収したが、ホテルのご厚意で飲料費サービスとなり、実際は一人3240円となったため、差額260×21名をご寄付とした。
前年度繰越金	369414	
合計	582914	

【支出の部】

* 単位は円

項目	金額	備考
事務費	139012	
情報保障費	58972	全体手話通訳
講師謝金・交通費	73820	
夕食交流会費	68040	3240円×21名
合計	339844	

残金 243070円【収入 582914円－支出 339844円】は、今後の研究協議会での運営費として使用します。

○原案通り、了承されました。

・議案3 2016年度事業計画

以下の通り、提案がなされました。

1. 定期的に運営委員会を開催し、運営基盤の充実を図る。
2. 全国盲ろう教育研究会総会・研究協議会報告を広く配布し、啓発活動をすすめると共に、会員の獲得に努める。
3. 全国盲ろう教育研究会会報を発行し、盲ろうに関する情報提供を行うと共に、会員相互の情報交換に役立てる。
4. 全国盲ろう教育研究会第14回研究協議会を開催し、盲ろう児・者に関わる教育研究の向上を図るとともに、第15回研究協議会の準備を進める。
5. 「盲ろう教育研究紀要第12号」の編集作業を行い、発行する。
6. Webサイトの内容の充実と活用を図り、情報提供および情報交換を図る。
7. 盲ろう教育に携わる教員等を対象とした研修会を開催し、教育の充実を図る。

○原案通り、了承されました。

・議案4 2016年度予算

以下の通り、提案がなされました。

【2016年度国盲ろう教育研究会予算案】

【収入の部】

*単位は円

項目	金額
前年度繰越	337207
年会費(2,000円×130名)	260000
合計	597207

【支出の部】

* 単位は円

項目	金額
定期総会報告書発送費	30000
会報発送費	30000
第14回研究協議会案内発送費	30000
研究紀要第12号発行費	200000
研究紀要第12号発送費	50000
Webサイト維持費	35000
事務費	100000
会議費	50000
予備費	72207
合計	597207

○原案通り、了承されました。

・議案5 規約の一部改訂について

以下の通り、提案がなされました。

【現行】

第1章 総則（事務局）

第2条 この会の事務局を、東京都文京区目白台3丁目27番6号 筑波大学附属視覚特別支援学校内に置く。

【改定案】

この会の事務局を、神奈川県横須賀市野比5丁目1番1号 国立特別支援教育総合研究所内に置く。

○原案通り、了承されました。

●全国盲ろう教育研究会 第14回研究協議会報告
○実践報告概要 【8月6日】13:45~15:15

「卒業後の生活、今とこれから」

盲ろう児とその家族の会 ふうわ 広重 真佐子 氏

盲ろう児とその家族の会 ふうわ 貝嶋 敦子 氏

盲ろう児とその家族の会 ふうわ 広重 真佐子 氏

息子 Kのプロフィールは以下の通りです。
昭和52年7月生まれ、風疹症候群と診断
生まれた時は右目全盲、左目白内障 9か月
で手術（光覚と物の影のみ）

8歳の時、左目網膜剥離、手術するも全盲と
なる

両耳 120dB

心臓奇形（心室中隔欠損、肺動脈狭窄他）4才の時手術にて完治

6歳の時、インシュリン依存性糖尿病発症、現在朝昼夕3回のインシュリン
注射（I型糖尿病）



Kは、父親の転勤で愛知県の知多郡へ、半田市で生まれました。

名古屋市の保健センターに幼い頃から通い、その後千種区に転居してろう学校の教育相談に通いました。再度転勤で北九州に戻ることになったため、小倉のろう学校の近くに家を借り、ろう学校の幼稚部に通いました。その後、下関の盲学校に盲ろうの生徒がいるという情報を得て、「きっと何かヒントが見つかるはず」と期待して下関に転居し、盲学校の幼稚部、そして高等部の1年まで過ごしました。

その間出会った先生方の誰もコミュニケーションをどう図ればいいのか、その知識を持っていなかったのだろうと思います。盲ろうの先輩がいたのに、その経験が生かされることもなかったということになります。親の私も、「盲ろうとは」をその頃はつかむことができず、「盲学校も違う、ろう学校も違う」と悶々としながら過ごしていました。

小倉のろう学校にいた5歳の頃、廊下の洗面所から教室に戻ろうとしたK、手にコップを持っていました。教室の入り口の戸が閉まっていたので片手で開けようとしたが、開きません。どうするか見ていると、何とコップを床に置いて、両手で戸を開けました。たったそれだけのことなのに、Kに学習能力があると強く感じたことをはっきり覚えています。

それなのに、なんの教育もしてやれないまま高校生になった、と言ってしま

っては申し訳ありません。大好きだった鉄棒の逆上がりを教えてくれたり、タッパーの右端を切り取ってスプーンですくうことを教えてくれました。他にもいろんな試みをしてもらいましたが、コミュニケーションにつながる取組みは見られませんでした。

高等部に入学する頃から、卒業後どうするか、どんな生活を、どこで、と考えていたところ、担任から「下関の郡部にあるはまゆう園という施設が定員不足で、下関までバスを出す予定である」という情報をもらいました。早速担任と一緒に見学に行き、環境や園長の考え方に惹かれて、作業所に併設されたデイケアに通うことにし、高校2年を迎える春に通所を始め、16年間もお世話になりましたが、この間にいろいろなことがありました。

・平成10年に山口盲ろう者友の会が設立。その年に盲ろう者中四国大会に参加し、現在のふうわの仲間や当時、国立特殊教育総合研究所にいらしたN先生に会う。Kは22歳になっていた。そこで会った子供たちの様子や、N先生との関わりを知って、今まで何もしてやれなかったことを今まで以上に残念に思い、Kに申し訳ない気持ちで一杯になった。そんな私に「盲ろう者は60歳になっても学習を続けていますよ」とN先生。この言葉で、【ここから始めればいい】と前向きな気持ちになることができた。その後も悔やむ気持ちは消えないが、この先生の言葉を支えに健一と向き合ってきた。

・山口盲ろう者友の会の会員つながりで、重複障害の研究をしている大学の先生と出会い、【物で目的を伝える】方法を学ぶ。サインの数は多くないが、Kゾーンを作り、慣れてくると自分で選ばせた。帰りのバスに乗るサインが大好きで、まだ帰る時間ではないのに選んだ時は、バスの鍵を開けてしばらく乗ったりもした。

・散歩をしている時、私と手が離れたKがずっと自分の手を重ねて差し出した。まるで頂戴のサインのように。私ははっとした。【誰かいませんか?】と言っているのだと気づき、思わず「いるよ」と手を重ねた。その後もこのサインはよく出てくる。

・手話を元にしたサインを使う。盲ろう者と活動を共にするなかで、必要を感じて手話を学び始めた。介助の人にわかりやすいように、手話を元にしたサインにしていく。Kが一番よく使う「まだ」もそのひとつである。サインは使っているうちに意味を理解して、自分の発信に使えるようになる。この「まだ」もいろんな場面で使っていた。例えば講演会で退屈したKが立ち上がろうとした時、「まだ」のサインでつなぎとめていた。ある時お風呂に入っていて、私が「もう上がろう」と「終わり」のサインをしようとする、なんと右手を左手につけない、おまけに縦に振っている。「まだ、入りたい」と自分で言

えた。意味を理解して使った。私は思わず「いいよ、わかったよ」とKの手の平に丸を書いた。

手話をもとにしたサイン



「終わり」



「まだ」



「ちょうだい」



「遊ぼう」

・全国盲ろう教育研究会やふうわが設立され、集いに参加する中でいろいろ学んできた。なにか1つでも種を拾って帰ろうと耳を傾けてきた。Kは時々、ズボンを脱いだり、車の中で暑かったりすると服を脱いでいた。ふうわの集いでのことだったと思うが、どこでも服を脱いで困るという子供のお母さんがN先生に相談されたことがある。その時N先生が「どこか一ヶ所、脱いでもいい所を作ると他の場所では脱がなくなります」と言われた。私はこの言葉を持って帰り、早速実行。Kは夜布団の中だけOKにした。夜はおやすみ、の後脱いでも何にも言わない。そのかわり、昼間脱いだらすぐ着せる、を繰り返した。するといつの間にか布団の中以外は脱がなくなった。

また、Kに感情は育っているのか、が疑問だった時、先生に質問した。「人はまず感情があって、その感情に名前をつけているだけ」の説明が入ってきて、

Kは表現できないだけで感じている、と思えるようになった。

・はまゆう園に通い始めて10年が過ぎ、園ではグループホームの話が取りざたされていた頃、県内に医療が必要で盲ろうであるKを受け入れてくれる施設があるのかどうか、市役所の福祉課に調べてもらったが、答えは【なし】であった。そこで、福井県の光道園を見学し、入所契約を交わした。

Kの弟も妹も独り立ちし、夫とKの3人で転居。契約から8年が過ぎていました。「愛なき人生は暗黒であり、汗なき社会は墮落である」これは光道園の園訓です。全盲である創立者の中道園長は、施設は単に生活能力なき者を收容して「生活の場」を与えるだけの建物であっては真の存在理由がない、人間として、社会人としてよく耐えうる人づくりを行い、体は不自由であっても社会を構成する一員たり得る能力を養成する訓練の場であり、施設も社会の一部であるという信念こそ大事であると考えられていました。その信念は今も引き継がれています。

作業や生活介護、老人などの建物に分かれていて、300人以上の利用者のほとんどが盲重複障害者である。その光道園の療護2課にKは毎日通っています。日中生活介護というサービスを利用しているのですが、ここには約30名の盲ろう者が生活しています。

昨年6月から通所の場所を増やしました。関わる人をもっと増やしたいとの思いから。週1日だけ「ふう」という民家をデイサービスに改築したところに通っています。広い療護2課ではトイレに行くのもなかなか難しいのですが、「ふう」は我が家と同じ広さなので、すぐに自分で行動できるようになりました。

当然ながらKが園で24時間生活する日はやってきます。それまでは少しでも思いが伝えられるようになること、そしてインシュリンを30年以上使っているKには合併症が出てくるかもしれないこと、そんな可能性も十分あることを園の職員とも共有しながら共に関わっていきたいと思っています。今、夫婦で決めていることは、できるだけ一緒にいよう、ということです。Kだけでなく、私たちの生活も楽しいと思えるし、一緒にやりたいことがまだまだたくさんあります。できる限り家族で暮らす、されど親亡き後を考えれば居場所、理解者の存在は必ず必要。それらを用意しながら、これからもなお、Kの成長を促していきたいと考えています。

盲ろう児とその家族の会 ふうわ 貝嶋 敦子 氏

娘 Rのプロフィールは以下の通りです。

平成4年7月生まれ 健常児として誕生

1才10ヶ月 ヘルペス脳炎に罹り、後遺症により全盲ろうになる

2才 国立特殊教育総合研究所（現 国立特別支援教育総合研究所）のN先生と出会う

平成7年4月～平成10年3月 Y盲学校幼稚部在籍

平成10年4月～平成16年3月 Y盲学校小学部在籍

平成16年4月～平成19年3月 Y訓盲学院中学部在籍

平成19年4月～平成22年3月 Y訓盲学院高等部在籍

平成22年4月～平成25年3月 Y訓盲学院普通部生活科在籍

平成25年4月～現在 月曜 かながわ地域活動ホームほのぼの通所
火～土曜 地域作業所わくわくわーく通所

1才10カ月の時にヘルペス脳炎にかかりました。1カ月間意識がなく生死をさまよいましたが、一命を取り留めました。ですが、意識が戻った時には後遺症により視力と聴覚を失いました。病気になる前は2語分（ワンワンかわいい、牛乳のみたい）を話していましたが自分の声も聞こえなくなったようで退院するころには話すこともなくなりました。意識が戻っても、突然見えなくて聞こえなくなった戸惑いとベビーベッドの中で点滴をした不自由な生活に泣いて暴れる日々でした。抱かれると辛い検査や治療ばかりで親に抱かれることも拒絶するようになっていました。どうしてあげたらよいのかわからず只々一緒に泣いていました。



退院が近くなり、点滴がはずれ、Rをベビーベッドから降ろしたときに自由になった娘が手探りで病室を歩き回り、盲ろうになって初めて笑いました。当時私は盲ろうになってしまったらこれから楽しい事はないのかと、悲観しておりましたので、娘の笑顔を見て、夫とこれからもRの笑顔が見られるように育てようと前向きになることが出来ました。とはいってもインターネットもない時代で盲ろうの子どもをどうしてあげたらよいのかわかりませんでした。とにかく常に動き回る娘に目が離せず、更に私の対応がわるかったのでしょうか、一度怒ったら軽く1時間は泣いて暴れ、自傷行為も激しく毎日途方にくれていました。

特総研のN先生との出会い

盲ろうになって半年程たった2才半のときに、かかっていた言語療法士の先生より国立特殊教育総合研究所のN先生を紹介していただきました。最初にお電話でN先生とお話をしたのですが、その時に先生がおっしゃったことが今でも忘れられません。私が、娘が病気の後遺症で盲ろうになったこと、そして娘を育てるのに途方に暮れている話をした時に、N先生が「お母さん、盲ろうのお子さんを育てるのに一番大事なことをもう既にされていますね、それはお母さんが明るいことです。ご家族が明るいことがとても大切なんです。素晴らしいです。」と褒めてくださいました。当時私は盲ろうになった経緯を話すと直ぐに涙が出てしまっていたのですが、頑張っって明るく話をしていました。そのことを察知されていらしたのか褒めてくださったことで、娘と向き合うことに自信のなかった私の励みとなりました。

そして、特総研に教育相談に行きました。そこで初めてRの行動には意味があるということを知りました。それまではただやみくもに動き回っているだけだと思っていました。部屋を調べるために最低3回は部屋の中を壁伝いで歩いてきたこと、部屋にあった大きなテーブルに登ったり降りたりしたのは高さを測っていたこと、そしてテーブルを後ろ向きで這いずっていたのは、体を使ってテーブルの大きさを測っていて、後ろ向きに進むのは、頭から進むと危ないので後ろ向きに動いていたということでした。盲ろうになって何も出来なくなってしまうと思っていましたが、Rは私が思っている以上にいろいろな事を考えていることを知りました。このことがきっかけとなりRに沢山の経験をさせてあげたいと思うようになりました。

反省

今回、その頃の活発な様子をホームビデオで確認しました。改めて当時の自分がこんなに盲ろうのことを理解していなかったのだと愕然としました。一例を挙げます。

ブロックをはめてあそんでいる場面でした。正方形のブロックを手探りで上手に積み重ねています。ところが10個位積み上ると高さがあるため不安定になり、力を入れてはめ込もうとするとブロックが崩れてしまいます。はじめは得意顔で積み上げていましたが、高くなると途中でブロックがはずれてしまい、何度もトライしますがうまくいきません。とうとう悔しくて自分の頭をたたき半べそをかいてしまいました。その様子を眺めながら私は全て声かけだけで、褒めたり慰めたりしています。スキンシップがないのでRは相手の様子がわからず、得意顔も直ぐにつまらなさそうな表情にかわりました。失敗した時にも声かけだけでなくさめているので、とうとう悔しさが爆発し頭を叩いて大泣き

して、ようやく私はRを抱き上げました。

盲ろうだとわかっていたはずでしたが接し方がわかっておらず本当にひどい対応でした。

はじめてのオブジェクトキュー

とにかく活動的でRに振り回される日々でした。食事も行儀が悪く落ち着いて座っておられず、それをご覧になったN先生がご自分が使われていた折り畳み式のミニテーブルを持ってこられて、このテーブルに食事を乗せて食べようと試みました。ところがなぜか椅子と勘違いし、そのテーブルに座って食卓のテーブルで食べることになりました。食べるのが大好きだったのでこのテーブルが食事のサインになり、お腹がすくと自分で立てかけてある場所から持ってきて組み立てて座って待つようになりました。これがRにとって初めてのオブジェクトキューでした。

旅行や外出に行くにも持参して自分で組み立ててセッティングしていました。小さな時はその光景はとても可愛いのですが、大きくなってもミニテーブルに腰掛けてはおかしいし、何と言ってもオブジェクトキューが大きすぎて運ぶのが大変です。食事のサインはのちにスプーンに変わり、口をトントンと手を当てるサインに変えていきました。今でもこのテーブルは我家に大切に保管してあります。N先生より盲ろう者はアルバムを見る事が出来ないのので思い出に残しておく懐かしむことができると教えていただき、このテーブルは保管していました。

テーブルの足が一本折れていますが、これにはあるエピソードがあります。元々先生のお古をいただいた物をフル活用していたので幼稚部の時にテーブルの足が折れてしまいました。これは大変！と私はとにかくRが壊れていることを知ったら怒ると思い、Rが学校に行ってる間に慌てて同じ大きさの折り畳みテーブルを買ってきてすり替えておきました。

Rが学校から帰ってきて食事をしようと自分で取りに行った時にテーブルを触って怒って泣き出しました。何がいけないのか分からず、N先生に相談しました。先生に「テーブルを替えるときに一緒にとりかえましたか？自分のテーブルが替わっていることに怒っていると思いますよ。」とアドバイスいただきました。

そして、壊れたテーブルを触らせると、確認し始めました。テーブルの脇に傷があったのです。その部分を触ると笑顔になりテーブルを組み立て始めました。でも足が折れているので滑り台のようになってしまいます。そこで新しいテーブルを



出して隣に置き一緒に交換しました。それからは納得して新しいテーブルを使うようになりました。この出来事以来、何でもRと一緒にいることを心掛けました。

ご飯についても以前は一緒に遊んでいたのにお腹がすぐにご飯を要求して、準備が間に合わず直ぐに食べられないと怒り出していました。おコメを研いで炊飯器にセットするまでの過程を一緒にいりご飯を炊けるまでには時間がかかること、匂いがしてくるとご飯ができることを体験させました。はじめは何度も炊飯器の蓋を開けて匂いを確認していました。ご飯が出来上がる過程を理解すると、炊き上がった匂いがしてくるとテーブルを組み立てるようになりしました。



お米は炊飯器にあり

幼稚部・小学部

3才になり幼稚部に入る時にどこの学校にしようかといくつか学校の見学に行きました。どの学校に行っても、「盲ろうのお子さんは初めてです。」といわれ、とまどいがありました。当時、4名の盲ろう児が在籍していたY盲学校に入学を決めました。

ですが、盲ろう教育に優れていたわけではありませんでした。幼稚部の先生はとてもRを愛情を持って可愛がってくださいました。でも、当時の私と同じで可愛がる事と教育はちがいます。幼稚部の頃のRはとにかく好奇心旺盛でジッとしていない子で常に動き回っていました。当時、私も担任の先生も大きな勘違いをしていました。指文字をずっと手の平に打ち続ければ、赤ちゃんが話しかけて言葉を覚えるように言語を獲得すると思っていました。担任の先生が指文字をRに使い始めたのですが、週に一度担当している先生が「私は指文字が出来ないので指点字をいれています。」とおっしゃったので、さすがに疑問に思いN先生に相談しました。

N先生は、直ぐに飛んできてくださり「言葉を獲得するには経験を沢山すること、まずはオブジェクトキューと簡単なサインから」と御指導いただきました。それからオブジェクトキューを増やし簡単なサインを入れ始めました。この簡単なサインも失敗をしてしまいました。私達は”もっと””ダメ””おしまい”等こちらにとって便利なサインを都合の良い時にするので、Rにとっては手を貸すと良いことがないと知り、直ぐに手をグーにしてサインさせないようになってしまいました。また、気持ちに寄り添ってあげることが出来ず、お

しまいの合図をすると、Rがまだ納得できていなくても体が小さいことをよいことに抱き上げて連れて行ってしまおう、物をさっと取り上げる等、信頼を裏切るようなことばかりしたので、悔しくて泣いたり自傷行為が激しく、頑なな性格にしてしまったと反省しています。

小学部に入ったらいろいろな事を学ばせてあげたいと思っていたところ、幸いにも盲ろう教育にたけたH先生が担任になりました。とても素晴らしい先生で目から鱗と思う出来事が沢山ありました。

幼稚部の時に活動ごとにオブジェクトキューを使ってみましようとな先生にアドバイスいただきましたが、幼稚部の先生は「Rさんは教室に居らず学校のいろいろな所についてしまい教室に戻れないので出来ない」といわれました。私も娘が教室にいられないのが悪いのだと諦めていました。

ところが、H先生は教科ごとのオブジェクトキューをリュックに背負って行動し、次の教科をリュックからオブジェクトキューを取り出してRに触らせて伝えていました。出来ないと思っていたことがリュックに入れて持ち歩くというちょっとした工夫で解決できたのですが私も幼稚部の先生も思いつきませんでした。

また、人を呼ぶ時には床や壁に頭を打ち付けていました。そうすると人が止めさせようと飛んでくるからです。自分から表すようになったサインだったのでなかなか止めさせることが出来ませんでした。それがH先生のお陰で人を呼ぶ時には手をあげてハイタッチを求めるように変わりました。H先生は決して強引にせず気持ちに寄り添いつつも根気よく教育してくださいました。

ところが、小学部に入ってからてんかん発作が発症するようになりました。ヘルペス脳炎の後遺症でおこるといわれていましたが、その発作がひどく一日に数え切れない程おきます。当時は発作で倒れてそのまま寝てしまうこともしばしばでした。これから教育をと期待していた矢先でしたので本当に残念でした。その時から現在に至るまでてんかん発作と付き合いながらの日々です。発作と薬の影響で思うように学習も進まず、とても緩やかな成長となってしまいました。

私は学習は小学部から、幼稚部は楽しく遊べたらよいと思っておりましたが、このときになって、てんかん発作のなかった幼稚部の頃に早期教育を積極的にしていたらもう少しコミュニケーションがとれていたのでは…と悔やまれてなりません。またその時には気付くありませんでしたが、盲ろう教育にたけている素晴らしい先生がいらしたのでから幼稚部の先生にアドバイスしていただきかったです。同じ学校に5人も盲ろう児が在籍していたのに先生同士がなぜ相談し合わなかったのだろうと本当に残念です。

盲ろう教育はマニュアルもなく、担任になった先生の力量次第など運任せのような教育ではなく、例え経験のない方法の分からない先生でも子供のために先生方同士、知恵を出し合って取り組んでくださったら良い教育に繋がると思いました。

小学4年生の時にH先生が転任されました。最後にさようならの合図をして別れたのですが、Rはさっさと自分の車に乗り込みドアを閉めてケロッとしていました。

春休みが終わって学校が始まり、少したって様子がおかしくなりました。家に帰ってからランドセルを下ろさなくなり、お風呂と寝る時以外はずっと背負っていました。学校でもちょっとした事で泣くのでH先生に会いたがってるのだとわかりました。

「さよなら」が【毎日別れる時のさよなら】と【ずっとさよなら】が同じサインだったので大切な先生とのお別れがわからなかったのです。心の成長と共にコミュニケーションも増やす必要性を感じました。



H先生に会いたい！

中学部・高等部

中学部より私立のY訓盲学院に転校しました。

学校が変わることを伝えるために、Rと一緒にY盲学校の荷物をまとめてダンボールに入れ、Y訓盲学院に運びました。学校が替わったということを理解したようでしたが、気持ちが納得できず入学式は大泣きして、とうとう講堂に入らず、入学式をボイコットしました。

環境が変わり慣れるのにしばらく時間がかかりました。気持ちがついていけず朝、学校に行くことを拒むので結局強引に家から連れ出しましたが、そうすると一日機嫌が悪く、学校でも些細なことで泣いて怒るので、これではいけないと思いました。それに、先のことを考えると力づくで従わせることは、これ以上体が大きくなれば難しくなる、何よりRの心の成長を考えたいと担任の先生と相談して気持ちが切り替わるまで遅刻してでも待つことにしました。しばらくすると段々拒否する時間が短くなりスムーズに登校できるようになりました。

Y訓盲学院は担任の先生だけでなく学部の先生方皆さんがRのことを理解しようとサインを覚えてくださり教育していただきました。グループの力は大き

く、そのことがとてもRの成長に影響があったと思います。

高等部普通科入学時には、経験を積み重ねたのでしょうか、スムーズに移ることが出来ました。てんかん発作は相変わらず頻発する毎日でしたが、根気強くご指導いただきサインの受信が増えてきました。受信が増えると、手を素直に貸してくれ、見通しがたつようになったことで精神的に落ち着きました。高等部普通科を卒業する頃にはすっかり自傷行為や泣くことが無くなりました。

高等部専攻科生活科（高等部普通科卒業後、さらに3年間、社会にでるために作業を中心に学習する科）ではさらに落ち着き、いろいろな作業ができるようになりました。かつては靴も履かない子でしたが、マスクをつけビニールの手袋をして、手にしたクッキーを食べることなく、強く握って割ることもなく、筒に入れる作業が出来るまで成長しました。かつては入学式をボイコットした娘が、卒業式には袴姿で静かに座って出席しました。18年の学校生活で少しずつ確実に成長した娘に、親バカながら感激で胸が一杯になりました。ここまで成長できたのは、Rに関わってくださった沢山の先生方が、どんなに緩やかでも娘の可能性を信じて根気よく教育くださったお陰だと感謝しております。

通所

地域作業所わくわくわーくは10年前に小学部のH先生、先天性盲ろう児の保護者、支援者と共に設立した盲ろう者が安心して通える作業所です。ですから、幸いなことに他の通所施設に比べとても恵まれた環境です。それでも学校と違いどうしても生活は単調になってしまいます。職員の方は教育者ではないので分からないことも沢山ありますが、一緒に相談しながら頑張ってRと向き合ってくださいています。



クッキーの袋詰め作業

週1日通っている、かながわ地域活動ホームほのぼのは、通所者が大勢いてわくわくわーくと比較すると職員が手薄です。入所の際、「多くの望みに沿うことは出来ません安全面を配慮するだけです」と言われておりました。それでも職員の方は一生懸命Rのためにできる範囲のことをして下さっています。時間をかけなくてもできること、関わる際にネームサインを行う、スケジュールボックスを使って一日の流れを伝えてもらうなどを取り組んでいただいています。

これから望むこと

以前の私は教育は学校にいる間だけ…と思い込んでおりました。中学部に入

った頃、あまりの緩やかな成長にもうこれ以上の成長は望めないと悲観した時期がありました。

今は焦らずあきらめず娘の緩やかな成長を楽しみたいと思っております。これから学校生活の何倍もの人生が待っています。生涯かけて学ぶことに一緒に寄り添っていただきたいです。一番の願いは学校時代に学習したスキルを下げないで欲しいことです。そのためには是非とも卒業した学校の協力が必要です。学校の先生に年に1～2回様子を見に来ていただき、日々の中で困ったこと、疑問に思うことを教育相談して欲しいと思っております。

盲ろう教育はとても根気がいります。気を抜いてやってあげてしまうとたちまち出来ていたこともやらなくなってしまいます。成長が緩やか過ぎて続けても意味があるのかと疑問に思うかも知れません。でも気がつくとも1年前にできなかったことができるようになっていたり、わかった！と思う瞬間の喜びはきっと関わっていただくとうご理解できると思えます。是非、盲ろうの子どもたちをとりまく方たちでタッグをくんでください。皆で大変なときは励ましあい、成長を喜び合ってください。ひとりひとりで頑張るよりもきっと大きな力になります。

○ワークショップ・分科会 【8月6日】15:30～17:00

以下のグループに分かれて実施しました。

① 盲ろう幼児児童生徒を初めて担当したあなたへ

参加者：8名（教員、施設職員）

参加者からは、盲ろうのお子さんの乳幼児期にどのような関わりが大切かということ、幼稚部での生活づくりや幼稚部から小学部への移行支援について、作業所などにおいて一日のスケジュールの伝え方や集団生活における課題などの話題や悩みが挙げられ、話し合いました。

乳幼児期のお子さんとの関わりにおいては、まずは、本人の好きなことなどを一緒に行う中で、楽しさや嬉しさを十分に共有し、それをきっかけにやりとりをすることが挙げられました。本人にとって好きなことや楽しいことは「もっとやりたい」という自発的な発信や他者との関わりややりとりにつながります。さらにオブジェクトキューを用いたやりとりや始まりや終わりといった概念の理解、将来的には準備や片付け、スケジュールボックスを使った予定の確認などへとつながっていくでしょう。本人にとって心地よい経験、楽しい経験を一緒に行う中で、本人が分かる手段を用いながらやりとりを重ねていくことが大切であることを参加者で確認しました。また、乳幼児期の盲ろうのお子さんをもつ保護者の教育相談においては、まずは保護者の思いに耳を傾け、しっ

かりと受け止めること、その上で、盲ろう児本人にあった支援や指導を提案し、一緒に取り組んでいくことの大切さを確認しました。

成人の盲ろう者が通う作業所などの施設においては、一日のスケジュールの伝え方や他の利用者の方と集団生活をする中で、例えば、次の人が待っているという状況をどのように本人に伝えるのかということや、そのような状況で盲ろうの方が自分でできることを止むを得ず支援者が手伝うことを本人にどう伝えるかなどの課題が挙げられました。スケジュールの伝え方については、比較的人手や一人当たりのスペースが確保できる学校段階では、カレンダーボックスなどを用いて予定の確認などを行っているが、学校卒業後の生活の場への移行を視野に入れた、本人へのスケジュールの伝え方、手段を考え、指導して行くことも学校の役目として必要になることを確認しました

最後に、私たち支援者は、盲ろう者本人の世界や思いを想像しながら、本人と一緒に、分かる方法で、伝え合い、共有し合い、取り組むことが大切であることを確認しました。

様々な悩みや課題に対して、短い時間ではありましたが、解決策を参加者みんなまで考えたり、アイデアを共有したりすることができました。

(文責：加藤敦)

② 盲ろう擬似体験

当初、7名で予定していたワークショップでしたが、体調や勤務の関係等で参加できなくなった方が多く、少人数での実施となりました。

アイマスクやシミュレーションレンズで視覚障害の状態をつくること、耳栓とノイズにより聴覚障害の状態をつくることを説明、実際に体験しました。

その後、「③国立特別支援教育総合研究所生活支援棟・スヌーズレン見学」に合流しました。

(口頭報告：雷坂浩之)

③ 国立特別支援教育総合研究所生活支援棟・スヌーズレン見学

参加者：23名（保護者、教員、研究者等）

今回の研究協議会会場となった国立特別支援教育総合研究所の「生活支援研究棟」と「スヌーズレンルーム」の見学という企画には、多くの方が関心を寄せられました。案内して下さったのは、国立特別支援教育総合研究所 総括研究員の齋藤由美子先生。

スヌーズレンルームでは、「スヌーズレン」という語の由来や理念、室内に設置されている光ファイバー、ブラックライト、ウォーターベッドなどのさまざまな道具の説明を丁寧にしていただきました。参加者は、室内の居心地のよいスペースを見つけて思い思いに見たり聞いたり触ったり匂いをかいだりし

て、体験しながら理解することができました。

生活支援研究棟では、玄関のウェルカムボードや台所の作業しやすい道具の工夫など、一つひとつの部屋や道具を、その用途、意義、背景、実際のお子さんの例などをとりあげながらわかりやすく紹介していただきました。すべて実際に体験しながらの説明だったため、アイデアを持ち帰って参考にしようと思った参加者の方も多かったことと思います。

(文責：柴崎美穂、左振恵子)

④サポートブックをつくってみよう

参加者：10名（保護者、教員、施設職員等）

【どのようなサポートブックを作っているか】

2人の方の家族が、実際にサポートブックを持ってきてくださっていました。Aさんのサポートブックは、これまでの研究会で見せてもらったものを参考に作ってみた、ということで、性格、好きな事や食べ物、嫌いなこと、簡単な身振りサイン等について、現在の様子を詳しく伝える内容のものです。様子が変わる度に、随時書き直しています。学校の先生に写真を撮ってもらったりデータを渡して書き加えてもらったり、と協力していただいたそうです。活用していく中で、困った時の対応方法（不安定な時、移動を促しても難しい時など）を入れてほしい、という要望が出されているので検討中とのことでした。

Bさんのサポートブックは、同じような基本的な情報の他に、普段の様子を知ってもらうために連続写真が入っています。しかし、変化がある度に随時入れ替えるのが難しい、というのが悩みだということでした。

【使い方について】

Aさんは、接し方を理解してもらいたい、とデイサービスや寄宿舍に行く時のリュックに入れていきます。また学校では教科によって先生が入れ替わるので、サポートブックの代わりに模造紙に必要な情報を書いて教室に貼っているそうです。この他、手元で見られるくらいのサイズにして教科担任の先生に持ってもらうと、みんなが同じ対応をしてもらえるのでは、と考えているとのことでした。

Bさんは、本人が伝えたいことを支援者が理解する、ということをサポートブックの大きな役割と考え、どういう仕種の時にどんなことを伝えているのか、を写真を活用してたくさん載せています。写真は入れられていませんが、荒れて困った時の対応についての項目も作っており、支援の役に立っているようです。

【サポートブックの活用をサポートする工夫】

サポートブックは、本人と支援者が会った時に同時に渡されることが多い

め、ゆっくりと見ている時間がないことが多いです。そのため、必要最低限のことに目を通したり困った時に必要な内容をすぐ探せるように、目次があると便利です。サポートシートのような1枚ものを別に作っておけば、短時間の支援にはそれだけで十分かもしれません。また、リングファイルなどで綴じられていれば、その時だけ必要そうなカードを抜き出して渡すこともできます。リングファイルなら、変化に対応して随時差し替えることも簡単なので、気軽に更新できる、という声も聞かれました。

また、本人の様子や好きな事は、結構短いスパンで変化していくこともあります。そのような最新情報は、月1回程度の通信を発行してお知らせする、いつも通っている施設とは連絡帳で共有する、などの工夫が紹介されました。

分科会での話し合いを通して、基本になる情報を載せたサポートブックはショートステイ等長期滞在の時に必要ですし、短時間の支援には必要な情報だけ抜粋したものやシートになったものが使いやすい、支援をつなぐにはこまめに情報発信や情報共有が役に立つ、とサポートのためのツールの活用について、少し整理ができたように思いました。今から作ろうとしている家族や施設の方々も参加されていたので、参考になったのではないのでしょうか。

(文責：長尾公美子)

○講演概要

【8月7日】10:00~12:00

「盲ろう者」取材体験記

TBSテレビ 報道局 報道特集ディレクター 河北 敏之 氏

盲ろうに関する取材を続け、番組制作に関わってきた河北氏は、東京都盲ろう者友の会の集まりに取材に行った10年程前に、報道に携わるものとして盲ろうを知らなかったことの衝撃から取材をスタートさせたこと、触手話、指点字など様々な方法でコミュニケーションをとり、「他者との関わりこそが生きる喜び」と語る盲ろう者の姿に取材を続けてきたこと、たまたまいい人に巡り会った、たまたまの機会に恵まれた、というような「たまたまに委ねられている危うさ」を感じながら、取材を続けてきたことを以下の映像とともに振り返りました。



【サタデーずばっと】

- ①「盲ろう者とは ～支援の状況と課題～」 2009年4月 放送
- ②「求められる支援 ～盲ろう者支援センター～」 2009年9月 放送

【報道特集】

- ③「盲ろう青年の大学挑戦」 2011年1月 放送
- ④「盲ろう大学生の今。アメリカの支援とは・・・」 2012年1月 放送
- ⑤「光と音を失った女子大生」
2013年5月 放送
- ⑥「盲ろう児教育の課題と現実」
2015年10月 放送



その中で、自治体の支援状況として、2006年度と2013年度を比較すると支援は進んできているものの、自治体によってかなりの格差がみられることを以下の例を挙げながら説明されました。

◇2006年度	年間予算		2013年度	年間予算
東京都	4259万円	→	8230万円	
山形県	37万円	→	160万円	

◇一人あたりの月間利用制限時間（2013年度）

大阪府 44時間、東京都 38時間、福井県 1時間

また、全盲ろうである福島智氏（東京大学先端科学技術研究センター教授）の「盲ろう者は、遅れてきた障害者」のことばには、他の障害に比べ、認知されるのが遅かったために、教育・福祉・行政などさまざまな分野で施策が十分されていない現状を示し、「盲ろう者は、花より団子よりコミュニケーション」のことばが、情報が得られにくい盲ろう者にとっては他者との関わりこそが生きる喜びであるという盲ろう者の置かれている状況を雄弁に語っているとの報告もありました。

そして、盲ろう児教育の課題として以下の3点をあげました。

1. 盲ろう児の実態調査が行われていないので、必要な施策が打ち出せない。
2. 家族も教職員もどこに相談していいのかわからないまま、困っている。
3. 盲ろうの子どもを指導できる指導者がいない。養成の仕組みもない。

そして、法的に盲ろうが規定されているアメリカの法体系、実際についての報告もありました。

また、2015年10月の報道特集放映後に義家文部科学副大臣が横浜訓盲学院を訪問し、盲ろうの子どもたちの様子をご覧になったときに、インタビューに応

じた副大臣の「盲ろう児は少数者であっても公教育として絶対に切り捨ててはならない、残念ながらその体制が十分でない、早急に実態調査をしたい、実態把握をしないことには施策が出せない、まずは実態把握から始める」との言葉も映像で流されました。

「国としての取組の予定は?」、「障害者差別解消法施行で盲ろう教育は進展はあるのか」、という問いかけ、「今後も盲ろう者をテーマにした取材を続けていきたい」との表明があり、講演は終わりました。

その後、保護者からも実態調査についての質問が出され、以下のような回答がありました。(回答者：国立特別支援教育総合研究所総括研究員 星祐子)

・研究所として2017年度の研究計画の中に重複児童生徒の実態調査をする計画があり、その中に盲ろうも含んでいるので、盲ろう幼児児童生徒についての実態調査は2017年度に実施する。2016年度については、盲ろうの子どもたちの実態と課題が明確になり、施策に生かせるような実態調査となるよう調査項目を検討するとともに、文部科学省や特別支援学校長会など関係機関と連絡を取り合い、実態調査実施に向け検討を進めているところである。

(また、出席されていた文部科学省初等中等教育局特別支援教育課の庄司特別支援教育調査官からも、研究所と連絡を取り合いながら、実態調査実施に向け調整していきたい旨、回答がありました。)



○ポスターセッション

以下、6本のポスターの発表がありました。全体の場でポスターの概要を説明後、興味関心のあるポスターのところに移動し、活発なやりとりが行われました。発表いただいた方々に感謝申し上げます。

①盲ろう児と教室環境

横浜訓盲学院 後石原 恵美子 氏

②うちゃんの成長記録

静岡県立沼津聴覚特別支援学校

廣島 順子 氏

③先天盲ろう児教育と盲ろうの歴史の探索

元 筑波技術大学 岡本 明 氏

④卒業論文執筆中（お楽しみに！）

ルーテル学院大学 森 敦史 氏

⑤中途盲ろう者の語りを聞く

ーコミュニケーションの変容をどのように経験したかー

東京都心身障害者福祉センター 柴崎 美穂 氏

⑥平成23年 生活のしづらさに関する調査

【全国在宅障害者】における盲ろう児者の結果

国立障害者リハビリテーションセンター研究所 北村 弥生 氏



○先天性盲ろう児者の活動プログラム

会場が久しぶりの国総研、実践報告が先輩保護者のお二人ということもあり、盲ろう児者活動プログラムの参加は、先天性盲ろう児者11名、兄弟姉妹2名、ボランティア16名でした。会場に隣接した筑波大学附属久里浜特別支援学校からも多くの先生方にお助けを頂きました。ご参加、ご支援くださった皆様にご心より御礼申し上げます。

活動場所にも恵まれ、研修棟の活動プログラム室、研究所のスヌーズレンとトランポリン、シーサイドリゾートのような久里浜特別支援学校のプール、野比海岸と、思い切り遊びつくしました。今年が目玉は「おやつバイキング」。スナック、せんべい、甘味、ゼリー、ヨーグルト、アイス、果物、ジュース、ポカリ、各種飲み物を小さいコップやお皿に並べ、触り比べ、におい比べ、味比べをしながら、品物を選んで食べる活動でした。果物を片端から食べたり、同じヨーグルトを何度もおかわりしたり、おつまみのイカクンに魅入られたり、お母さんからお聞きした好きなお菓子を探し当てたりして、おいしいひと時を

過ごしました。

研究会に来てくれた盲ろう児者は、いろいろな人とかかわり、充実した時間を過ごしました。ボランティアには、民間からの皆さんに、STの方、国リハ学院の学生、盲学校の教員が加わり、盲ろう児者ファンのすそ野を大きく広げることができました。

(文責：星野勉)



研究協議会会場から望む久里浜の夕陽

◆研究協議会では、皆様が持ち寄ってくださった全国各地の実践報告・交流を大切にしています。是非ともポスター発表をご検討ください。

第13回研究協議会において、「ぼくの余暇の楽しみ マラソン」と題してポスターを発表してくださった尾崎雅君（盲ろう青年）から、ポスター発表についてのメールが届きましたので、ご紹介します。

ぼすた一の はっぴょーに ついて

おざき まさ

きょねんの ぼくの ぼすた一 はっぴょーの ないよーわ まらその
ことに ついて はっぴょーを しました。

ぼくわ はっぴょーの ときに がんばって しゅわと ゆびもじを しな
がら はっぴょーを しました。

まらその ことに ついて はっぴょーの ないよーわ れんしゅーの
よーすとか どんな まらそん たいかいに さんか して いるか
はなしを しました。

まらそん れんしゅーわ 1かげつ 2かいぐらいです。

おおさかの わーわーず まらその れんしゅーに 2かげつに
1かいぐらい さんか して います。

ばしょわ ながい こーえんです。

いろいろな ばんそーしゃと いっしょに はしるのを たのしみに して
います。

まらその れんしゅーを する ときわ ばんそーしゃと いっしょに
ろーぷひもを もって がんばって はしって います。

おおさか まらそん たいかい ちゃれんじ らんに さんか して
8.8Km-を ばんそーしゃと いっしょに ごーるまで がんばって はしっ
ています。

ならけんの かしはら こーえん きょーぎじょーで らんらん りれー
まらそん たいかいに ぐるーぷで さんか して います。 1しゅー
1.5Km-を こーたい して はしります。

なら まらそん たいかいや こおりやましめん まらそん たいかいや
しかく しょーがいしゃ きょーと まらそん たいかいにも さんか して
10Km-を ばんそーしゃと いっしょに ごーるまで がんばって はしって
います。

はしるのわ きもち いいです。

ぼくわ はっぴょーの ときに ちょっと むずかしかったけど
がんばって はっぴょーを しました。

(原文のまま)

●運営委員会・事務局より

第14回定期総会・研究協議会で実践報告、講演、ポスター発表をしてくださった方々、そしてご参加いただいた皆様、お忙しい中、ありがとうございました。今回も、ボランティアの方々をはじめとして、多くの方々に多大なるご協力をいただきましたこと、心よりお礼申し上げます。皆様からいただいたアンケートでは、今後の運営に対しても貴重なご意見をいただくことができました。これからもより充実した研究協議会となるよう努めてまいりますので、今後ともご協力のほど、宜しくお願いいたします。

●会費納入のお知らせ

・年会費（2,000円／年）の納入状況を、宛名ラベルの下欄に記載しています。未納のある方は、納入をお願いいたします。ラベル印刷後に納入された場合など、行き違いがありましたら、どうぞご容赦下さい。

（例）「2016未」：2016年度分未納を表しています。

・ご本人名義で納入してください。「〇〇年度年会費」と記入してください。

◇振込・振替先（みずほ銀行、または ゆうちょ銀行をご利用下さい）

みずほ銀行 本郷支店

口座番号 普通預金 8062806

口座名義 全国盲ろう教育研究会会計 柴崎 美穂

ゆうちょ銀行

口座番号 00100-6-484136

加入者名 全国盲ろう教育研究会

●連絡先変更等のある方は、お手数でも事務局までご連絡ください。

●2017年度の夏の盲ろう関係の大会・集い等のご案内

盲ろう児とその家族の会ふうわの集い

7月22日（土）・23日（日） 福井にて開催

CHARGEの会 夏の集い

7月29日（土）・30日（日） 広島にて開催

全国盲ろう者大会

8月18日（金）～20日（日） 岩手にて開催

☆☆お知らせ☆☆

◆全国盲ろう教育研究会 第15回定期総会・研究協議会

期日：2017年8月5日（土）・6日（日）

場所：国立特別支援教育総合研究所

（神奈川県横須賀市野比5-1-1）

内容（予定）

：講演、実践報告、ポスター発表、分科会

◆国立特別支援教育総合研究所では、このたび、盲ろう教育に関するリーフレットを作成しました。同封いたしますので、ご活用ください。なお、リーフレットは以下からご覧いただけます。

<http://www.nise.go.jp/cms/resources/content/12961/20170306-181958.pdf>